

# 中国共産党の新疆統治の始まりと 少数民族エリート（1949-52年）

熊倉潤

（アジア経済研究所研究員）

## 【要約】

現在、中共の新疆統治がもたらした構造的、本質的な矛盾が、いよいよ国際社会の関心の的となっている。しかし遺憾なのは、中共の新疆統治、つまり現地の少数民族を組み込んだ統治体制がいかんして始まったのかについて、歴史資料に基づいた実証的な分析は数少ないことである。1949年12月の新疆省人民政府成立以来、中共は新政府に現地の少数民族エリートを引き入れ、1952年6月の中共中央新疆分局の改組に伴い、中共党組織の上層部においても少数民族エリートの起用が拡大した。その背後には、当時、中共中央西北局第二書記であった習仲勳が指導的役割を果たしていた。習仲勳が指導した政策の穏健化は、少数民族エリートの更なる起用につながった。本稿では、中共が新疆統治の黎明期（1949-52年）に、少数民族エリートをいかに吸収したかについて考察する。

キーワード：新疆、少数民族、王震、習仲勳、セイフディン

## 一 はじめに

1949年10月1日の中華人民共和国建国宣言の僅か数日前、9月25日と26日に、国民党新疆警備総司令陶峙岳と新疆省政府主席ブルハン・シャヒディ(包爾漢・沙希迪)がそれぞれ軍と政府を代表して、中国共産党(以下中共)の側につくことを宣言した。これ以降、新疆は、中共統治下に組み込まれていくこととなる。中共は新疆の統治を確固ならしめるにあたり、少数民族エリートをいかに新政府に吸収したのか。また、52年6月の中共中央新疆分局の改組を通じて、新疆省指導部の顔ぶれはどのように変化したのだろうか。

このときの改組の背景には、習近平・現国家主席の父にあたる習仲勳(当時、中共中央西北局第二書記)も大きく関係していたが、このイシューに関する先行研究は非常に少ないのが現状である<sup>1</sup>。実は、新疆統治の方向性をめぐり、王震と習仲勳が対立し、王震の方向性に「錯誤」があったと判断されたことが、少数民族エリートの更なる起用にもつながった可能性がある。本稿は以上の諸点を分析し、1949年から52年という中共の新疆統治の黎明期に、少数民族がいかに中共側に組み込まれたのかを考察する<sup>2</sup>。

---

<sup>1</sup> 1949年から52年にかけての新疆の政治的動向に関しては、日本語でもすでに優れた研究がある。たとえば、田中周「新疆ウイグル自治区における国家統合と民族区域自治政策——1950年代前半の自治区成立過程から考える——」『早稲田政治公法研究』第94号(2010年)、63～76ページ。もっとも、同論文も主題は民族区域自治政策にあり、52年6月の中共中央新疆分局の改組の問題を取り上げていない。

<sup>2</sup> 1949年から52年という時期区分は、以上に述べたように、新疆の政治における転換を根拠としている。これは全国で三反五反運動が推進されていた時期と重複するが、同運動との間に、特に関連があるものではない。また他の少数民族地域においても、この時期区分が特別な意味を持つということはない。

なお、以下の本文では、時代状況をリアルに描くために、当時用いられた表現を敢えて直接引用したところがある。特に本稿で多数引用した『新疆日報』の記事には、プロパガンダ、事実の歪曲、偏向を含む箇所がある。それを敢えてここで紹介する所以は、筆者は当時の中共の営為それ自体が興味深い歴史的行為であると認識しており、その姿を描出し、読者に紹介したいためである。それは決して本稿の読者に中共の主張の正当性を印象づけようとする意図ではないことを前もってお断りする。

## 二 新疆省指導部の成立（1949-50年）

国共内戦の末期まで中国共産党の勢力が浸透していなかった新疆では、1949年8月、鄧力群がモスクワから新疆に赴き、国民党新疆警備総司令陶峙岳と新疆省政府主席ブルハンに、中共中央の新疆「平和解放」の意向を伝達した<sup>3</sup>。9月19日、ブルハンは鄧力群を通じて毛沢東宛に電報を発信し、「国民党反動政府」から離れ共産党の側につく決意を述べ、23日、毛沢東は返電し、ブルハンに対し全新疆の解放のため奮闘することを呼びかけた。陶峙岳とブルハ

---

<sup>3</sup> 1949年9月の新疆の「解放」から同年12月の新疆省人民政府成立に至る過程に関するこの段落の記述は、以下の情報に拠る。中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編『中國共産黨新疆維吾爾自治區組織史資料』（北京：中共黨史出版社、1996年）、頁579；白振聲・鯉淵信一編『新疆現代政治社會史略』（北京：中國社會科學出版社、1992年）、頁477～484；包爾漢『新疆五十年』（北京：文史資料出版社、1984年）、頁358～361；包爾漢『新疆五十年 包爾漢回憶錄』（北京：中國文史出版社、1994年）、頁363～364；鄧力群『鄧力群自述（1915-1974）』（北京：人民出版社、2015年）、頁195～198；何明主『共和國人物檔案 共和國首任地方黨政主要領導』（北京：中國大百科全書出版社、2010年）、頁145～146；王震傳編寫組『王震傳』上（北京：當代中國出版社、1999年）、頁423～450；王震傳編寫組『王震傳』（北京：當代中國出版社、2008年）、頁323～344。

ンは、それぞれ9月25日、26日に、軍と政府を代表して人民民主陣営の側につく旨を表明した<sup>4</sup>。翌27日に新疆省政府は新疆省臨時人民政府に改名され、28日には、毛沢東主席、朱徳総司令が陶峙岳とブルハンの立場を正確であると評価し、人民解放軍と協力し、新しい新疆の建設のため奮闘しようと呼びかけた<sup>5</sup>。こうして中華人民共和国建国の前夜ともいうべき時期に、新疆省政府は中共側に帰順し、新疆の「平和解放」を達成した。11月7日王震率いる部隊が迪化（現、ウルムチ）に入り、翌8日、中共中央新疆分局が成立、12月17日に中央人民政府の批准を経て、新疆省人民政府が成立した。

新たに発足した新疆省人民政府の主席には、国民党時代から引き続き、ブルハンが就任した。ブルハンは1894年、ロシア帝国カザン県に生まれ、ドイツのベルリン大学に留学した。ソ連と「特別な関係」<sup>6</sup>にあり、1934年初頭に、新疆省政府主席盛世才の命によりソ連軍を国境で出迎え、彼らに中国の軍服を提供する役割を果たし、盛世才の権力の確立に貢献したと言われるが、後に盛世才により投獄され、盛世才の失脚後、省政府主席の地位に上り詰めた<sup>7</sup>。旧

---

<sup>4</sup> これは中共側から「通電起義」、国民党側から「通電投匪」といわれた。

<sup>5</sup> 中共中央文獻研究室他編『毛澤東民族工作文選』（北京：中央文獻出版社・民族出版社、2014年）、頁35。

<sup>6</sup> David D. Wang, *Under the Soviet Shadow: The Yining Incident, Ethnic Conflicts and International Rivalry in Xinjiang 1944-1949* (Hong Kong: The Chinese University Press, 1999), p. 367.

<sup>7</sup> ブルハンがソ連軍を国境で出迎えた点については、以下参照。王柯『東トルキスタン共和国研究——中国のイスラムと民族問題』（東京大学出版会、1995年）、47ページ；寺山恭輔『スターリンと新疆』（社会評論社、2015年）、157ページ；David D. Wang, *Under the Soviet Shadow: The Yining Incident, Ethnic Conflicts and International Rivalry in Xinjiang 1944-1949*, p. 166；包爾漢、前掲書『新疆五十年』、頁209～210。中華人民共和国建国前のブルハンに関する

政権の指導者を中共に帰順させ、新政権上層部に積極的に引き入れる上層統一戦線工作の政策により、ブルハンは人民解放軍進駐後も新疆省人民政府において、その地位を保った。

中華人民共和国建国後もその任にあり続けた旧政権の省政府主席は、中国全土を見てもブルハン一人であった<sup>8</sup>。この人事が実現した背景には、少数民族地域、なかんずく新疆における上層統一戦線工作が、漢族地域における統一戦線工作に比べ、より広汎な団結を意図していたことと関係している。またこうした基本方針に加えて、ブルハンと彭徳懐、王震の関係が良好だったことも指摘できるだろう<sup>9</sup>。ブルハンは国民党時代の地方政治エリートの一人であったが、「祖国統一」のために全力を尽くしたとして、後年になっても評価されている<sup>10</sup>。

新しい新疆省人民政府では、主席ブルハンを頂点として、ウイグル族その他のいわゆる少数民族エリートが指導的地位に引き入れられた。そのなかには、1944年以降、新疆北部の中ソ国境に接した

---

るその他の点については以下参照、包爾漢、前掲書『新疆五十年』、頁209～210；包爾漢、前掲書『新疆五十年 包爾漢回憶録』；David D. Wang, *Under the Soviet Shadow: The Yining Incident, Ethnic Conflicts and International Rivalry in Xinjiang 1944-1949*。

<sup>8</sup> 孟慶春・陳重伊『共和国省長』（北京：華文出版社、2008年）、頁346～347。

<sup>9</sup> 鄧力群、前掲書『鄧力群自述（1915-1974）』頁205。

<sup>10</sup> 鄧力群は、ブルハンの政治態度が非常に明らかであり、その考えは大変鋭敏であり、「新疆は各族人民の新疆、中国は各族人民の中国である」と言っていたとして高く評価している（鄧力群、前掲書『鄧力群自述（1915-1974）』頁205）。また、80年代に自治区人民政府主席を務め、第10期全人代常務委員会副委員長となったイスマイル・エメトウ（ウイグル族）は、2009年のブルハン同志没後20周年記念座談会に宛てた文書のなかで、ブルハンの「祖国統一、民族団結と人民の事業のために英雄奮闘した一生」を称賛した（包爾漢、前掲書『新疆五十年 包爾漢回憶録』頁388～389）。

イリ（伊犁）、タルバガタイ（塔城）、アルタイ（阿爾泰）の三区で、ソ連の支持を受け、反国民党の独立運動、三区革命を指導した人々も含まれていた。三区革命の最も著名な指導者たちは、49年8月25日、人民政治協商會議に出席するため北平（現、北京）に向かう途中、ソ連上空で遭難し、謎の事故死を遂げたとされるが<sup>11</sup>、このとき北平に向かわず、生き残った関係者も少なからずいた。

生き残った三区革命関係者のなかで代表的な人物が、セイフディン・エズィズィ（賽福鼎・艾則孜）である。セイフディンは、ブルハンと異なり、ロシア帝国の生まれではなく、1915年に新疆で生まれたとされるが、セイフディンの父はロシア帝国から移住した人物であったという<sup>12</sup>。セイフディン自身もソ連と深い縁があり、1930年代にソ連に留学し<sup>13</sup>、ソ連共産党に入党したといわれ

---

<sup>11</sup> この遭難については、今なお真相は明らかでない。James A. Millward and Nabijan Tursun, “Political History and Strategies of Control,” in S. Frederick Starr, ed., *Xinjiang: China's Muslim Borderland* (Armonk, N. Y.: M. E. Sharpe, 2004), pp. 86-87. 三区革命に関しては、王柯、前掲書『東トルキスタン共和国研究——中国のイスラムと民族問題』を参照。

<sup>12</sup> セイフディンは新疆のアトウシュ（阿図什）の人とされる（張聲作編『當代中國少数民族名人録』〔北京：華文出版社、1992年〕、頁326）が、塔城で生まれたという（Donald H. McMillen, *Chinese Communist Power and Policy in Xinjiang, 1949-1977* [Boulder Colorado: Westview Press, 1979], p. 34）。なお、セイフディンの父はロシア帝国領（後のキルギス共和国領）からアトウシュに移住した人であったとセイフディン自身が述べている（賽福鼎・艾則孜『天山雄鷹：阿布杜克力木・阿巴索夫生平』〔北京：中國文史出版社、1987年〕、頁1）。

<sup>13</sup> セイフディンのソ連留学については不明な点が多い。かつてはモスクワに留学したと言われていたことがあり（たとえば、Donald H. McMillen, *Chinese Communist Power and Policy in Xinjiang, 1949-1977*, p. 34）、1949年10月23日付けの中共中央の彭德懷に対する電報でも、モスクワに留学したことが記載されている（中共中央文獻研究室編『建國以來毛澤東文稿』第一冊〔北京：中央文獻出版社、1987年〕、頁87）。しかし、セイフディン自身は、後に出版された自著のなかで、タシケントの「ソ連中央アジア国立大学」に留学したと述べてい

る<sup>14</sup>。ソ連から帰国後、三区革命の指導者の一人となり、臨時政府、新疆省連合政府において教育庁庁長を務めた。中華人民共和国建国後、セイフディンは、帰順した国民党の将軍陶峙岳と同じく人民解放軍新疆軍区副司令員の地位を与えられたが、このとき新疆軍区副司令員となった少数民族は彼だけである<sup>15</sup>。その後発足した新疆省人民政府において、彼は漢族の高錦純と並んで副主席に就任し、少数

---

た（賽福鼎・艾則孜、前掲書『天山雄鷹：阿布杜克力木・阿巴索夫生平』頁1、36；賽福鼎・艾則孜『賽福鼎回憶錄』〔北京：華夏出版社、1993年〕、頁221～243）。『当代中国少数民族名人録』も、セイフディンが「ソ連に赴き中央アジア大学で学習」したことを伝えている（張聲作編、前掲書『當代中國少数民族名人録』頁326）。欧米の研究も、タシケントに留学していたと指摘するものが多い（Howard L. Boorman and Richard C. Howard, eds., *Biographical Dictionary of Republican China*, vol. 3 [New York: Columbia University Press, 1970], p. 88; Andrew D. W. Forbes, *Warlords and Muslims in Chinese Central Asia: a political history of Republican Sinkiang 1911-1949* [Cambridge; New York: Cambridge University Press, 1986], p. 180; Bartke Wolfgang, ed., *Who's who in the People's Republic of China*, 2<sup>nd</sup> Edition [Munchen, New York, London, Oxford, Paris: Saur, 1987], p. 396)。最近の研究に拠れば、1930年代に盛世才がソ連に派遣した留学生は、モスクワではなく、タシケントの「中央アジア国立大学」（Среднеазиатский Государственный Университет [САГУ]）で受け入れられることが、34年7月、9月の2回のソ連共産党政治局会議により決定されていたことが明らかになっている（寺山恭輔、前掲書『スターリンと新疆』249～250ページ）。

<sup>14</sup> セイフディンがソ連共産党に入党していた点については、以下を参照。Howard L. Boorman and Richard C. Howard, eds., *Biographical Dictionary of Republican China*, vol. 3, p. 88-89; Andrew D. W. Forbes, *Warlords and Muslims in Chinese Central Asia: a political history of Republican Sinkiang 1911-1949*, p. 180, 222; Donald H. McMillen, *Chinese Communist Power and Policy in Xinjiang, 1949-1977*, p. 34; David D. Wang, *Under the Soviet Shadow, The Yining Incident, Ethnic Conflicts and International Rivalry in Xinjiang 1944-1949*, p. 208.

<sup>15</sup> 中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書『中國共產黨新疆維吾爾自治區組織史資料』頁838。なお新疆軍区については後述の註25参照。

民族指導者のなかでブルハンに次ぐナンバー・ツーとなった。

ブルハン、セイフディンの他には、49 年末から 50 年初頭の段階で、たとえば新疆省人民政府秘書長代理に就任したアブドゥラ・ザクロフ（阿不都拉・扎克洛夫）（ウイグル族）がいた。彼も三区革命の指導者の 1 人で、このあと 54 年に秘書長に正式就任した後、60 年代に自治区党委員会常務委員を務めることになる。ほかにもウイグル族は多く、公安庁庁長のアブリズ・ムフメティ（阿不列孜・木合買提）、民政庁庁長のアブドゥラフマン・モヒティ（阿不都熱合滿・穆義提）、交通庁庁長のマフスットウ・ティイポフ（買合蘇德・鉄衣波夫）、水利庁庁長のアリムジャン・エキムバエフ（阿里木江・哈肯巴也夫）らがいた。

ウイグル族が指導的地位に比較的多く配置されていたが、ここで重要なことは、人口の多いウイグル族だけでなく、その他の少数民族にもポストが配分されていた点である。たとえば、交通庁運輸局局長にカザフ族のヘムザ・ケルバイ（哈木扎・克爾拜）、畜牧庁庁長に蒙古族のダシャフ（達夏甫）、衛生庁庁長にウズベク族のヤコッベク（雅庫甫伯克）、教育庁庁長に同じくウズベク族のエヌヴェル・ハンババ（阿尼瓦爾・汗巴巴）が就いていた。このうちダシャフは、51 年から 66 年まで新疆省各族各界人民代表会議協商委員会（のち自治区政治協商会議）の副主席を務めた新疆の蒙古族エリートの代表格である。またエヌヴェル・ハンババは、三区革命の指導者の一人で、モスクワ留学組の中心人物として、1944 年以前から秘密組織の結成に携わったと見られている<sup>16</sup>。建国後は新疆省、自治区の文教畑を歩み、文革後、自治区政治協商会議副主席に就任し

---

<sup>16</sup> 王柯、前掲書『東トルキスタン共和国研究——中国のイスラムと民族問題』頁 108；賽福鼎・艾則孜、前掲書『天山雄鷹：阿布杜克力木・阿巴索夫生平』頁 45。



表1 1950年1月1日当時の新疆省人民政府部門の指導的地位の役職、人名、民族一覧

役職	人名	民族
人民政府委員会主席	ブルハン・シャヒデイ(包爾漢・沙希迪)	ウイグル族
副主席	高錦純	漢族
副主席	セイフデイン・エズイズイ(賽福鼎・艾則孜)	ウイグル族
秘書長	劉孟純	漢族
弁公庁主任	侯亢	漢族
財政経済委员会主任	王震	漢族
文教委员会主任	鄧力群	漢族
公安庁長	アブリズ・ムフメテイ(阿不列孜・木合買提)	ウイグル族
高級人民法院院長	ブルハン・シャヒデイ(包爾漢・沙希迪)	ウイグル族
民政庁長	アブドウラフマン・モヒテイ(阿不都熱合滿・穆義提)	ウイグル族
財政庁長	辛蘭亭	漢族
交通庁長	マフスツトウ・テイイポフ(買合蘇徳・鉄衣波夫)	ウイグル族
農林庁長	涂治	漢族
水利庁長	アリムジャン・エキムバエフ(阿里木江・哈肯巴也夫)	ウイグル族
教育庁長	エヌヴェル・ハンババ(阿尼瓦爾・汗巴巴)	ウズベク族
衛生庁長	ヤコツベク(雅庫甫伯克)	ウズベク族
新疆郵電管理局長	陳虛舟	漢族

(出典)『中國共産黨新疆維吾爾自治區組織史資料』(1996年)をもとに筆者作成。

た、新疆のウズベク族エリートの代表的人物である。

この点、中国で出版されている研究書は、人民政府部門の指導的地位の配置についてまで細かく取り上げない傾向がある。たとえば、『中国共産党与新疆民族問題』は、当時、人民政府委員33人のうち、「漢族は11人のみで、少数民族が66.66%を占めていた」と記すに留まっている<sup>17</sup>。このように記述することで、人民政府の上層部にいかに少数民族が多く登用され、漢族が少なかったかを読者に印象づける意図があるのかもしれない。しかし、人民政府の権力を分有する地位のなかに少数民族がどのくらい含まれていたのかを知る上では、人民政府部門の指導的地位の少数民族比率を観察すべきであると考えられる。表1から明らかのように、人民政府部門の指導的地位に占める少数民族の割合は17人中9人と半数に達していたが、逆に言えば約半数にとどまっていた。このことは、政権の指導的地位において漢族の人数も少数民族と同じように多かったことを示しており、単に人民政府委員の3分の2が少数民族であったというよりも、政権の実態を反映している。

漢族に関して言えば、上層統一戦線工作の範囲は、少数民族指導者だけでなく、実務経験の豊富な漢族の元国民党官僚も包括するものであった。たとえば、水利庁の場合、庁長のエキムバエフの下で、副庁長には国民党時代に新疆省水利局長を務めていた王鶴亭が就任した<sup>18</sup>。概して最も目立つ庁長の地位には、少数民族が据えられることが多かったが、王鶴亭のような元国民党官僚はその経

---

<sup>17</sup> 朱培民・陳宏・楊紅『中国共産党与新疆民族問題』（烏魯木齊：新疆人民出版社、2004年）頁48。

<sup>18</sup> 『新疆日報』1950年1月3日；中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書『中国共産党新疆維吾爾自治區組織史資料』頁602。

験を買われて、政権交代後も類似のポストに留任することもあった<sup>19</sup>。他方、なかには庁長と副庁長が共に少数民族の庁もあり、畜牧庁の場合、前述の庁長ダシャフの下に、若キエヌヴェル・ジャクリン（安尼瓦爾・賈庫林）（カザフ族）が副庁長の職に就いた。エヌヴェル・ジャクリンは、その後昇進し、カザフ族として初めて、59年に自治区人民検察院院長、60年に新疆ウイグル自治区党委員会常務委員に就任することになる<sup>20</sup>。このように、少数民族と漢族の「党外人士」が集まって新疆省人民政府を支えていたことがわかる。正副庁長のポストに少数民族と漢族の「党外人士」、あるいは少数民族同士を配置する人事は、少数民族地域における「統一戦線」の一つの姿であったと考えられる<sup>21</sup>。

こうして多くの少数民族が要職に配置され、少数民族は庁長、局長級の人員の約半数に達した。とはいえ、共産党が国家を領導する党・国家体制の下では、権力の中心は、国家機関の人民政府ではなく、党指導部にある。この時期の新疆省の党指導部は、中共中央新疆分局を頂点としていた。中共中央新疆分局の構成はどのような

---

<sup>19</sup> 52年10月に新疆分局統一戦線部部长に就任した呂劍人は、自身の回顧録のなかで王鶴亭を「水利専門家」と評している（呂劍人『我的回憶』〔西安：陝西人民出版社1997年〕、頁123）。

<sup>20</sup> 中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書『中國共產黨新疆維吾爾自治區組織史資料』頁114、602。

<sup>21</sup> やや後のことになるが、呂劍人の回顧録によれば、55年から66年までの正副庁長等、指導的地位に就いていた「党外人士」の数は細かく数えられており、その数に細心の注意が払われていたことがわかる。また遅くとも54年の段階で、中共中央新疆分局は各級人民代表大会代表、人民政治協商會議委員に占める「党外人士」の比率を予め設定していたようであり、それによれば省級人民代表大会代表に占める「党外人士」の比率は25%、各級人民政治協商會議委員に占める「党外人士」の比率は最低でも60%が予定されていた。呂劍人、前掲書『我的回憶』頁120～122。

っていたのだろうか。

1949年10月12日、中共中央は、中共中央新疆分局の書記に王震を就任させ（50年11月以降、第一書記）、徐立清を副書記とし、羅元癸、張賢約、饒正錫、王恩茂、郭鵬、曾滌、鄧力群を委員とすることを決定した<sup>22</sup>。このとき書記以下、委員の全員が漢族であった。書記の王震は、湖南出身、1927年入党の古参幹部で、49年11月人民解放軍第一野戦軍第一兵団の司令員兼政治委員として新疆に入った人物である。新疆における人民解放軍の最高指導者の地位にあった彼が、軍だけでなく党組織を率いていた。また中共中央新疆分局委員には、抗日戦争と第二次国共内戦の時期に王震のもとで働いた王恩茂がいた<sup>23</sup>。王恩茂はこのとき中共南疆区（カシュガル）委員会書記として、新疆南部の党組織を統括する立場にあった。同じく中共中央新疆分局委員として、鄧力群も新疆に在った。鄧力群は49年から52年まで中共中央新疆分局委員のち常務委員、同宣伝部長を務めた。

中共中央新疆分局は、中共中央西北局の指導を受けており、西北局の第一書記は彭徳懐であった。彭徳懐はまた、政府の系統から言えば、新疆省人民政府を管轄下に含む西北軍政委員会的主席でもあった<sup>24</sup>。また軍の系統から言えば、新疆軍区司令員は彭徳懐であ

---

<sup>22</sup> 中共中央文獻研究室編、前掲書『建國以來毛澤東文稿』第一冊、頁49；中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書『中國共產黨新疆維吾爾自治區組織史資料』頁24。

<sup>23</sup> 抗日戦争以來、49年までの王恩茂と王震の関係については、王恩茂の日記に詳しい。陳西夫・呂乾訓編『王恩茂日記』（北京：中央文獻出版社、1995年）。

<sup>24</sup> 西北軍政委員会が新疆省人民政府を領導する機関として位置づけられていたことは、49年12月、新疆省人民政府の正式設立を決定した会議におけるブルハンの演説からも窺える。演説のなかで彼は「中央人民政府、英明な領袖毛沢東主席、および西北五省における軍政の領導者彭徳懐主席および副主席各位の領導の下、

り、他方、王震は当初、同軍区第一副司令員という肩書きを有しており、50年12月以降、司令員代理とされた<sup>25</sup>。したがって当初、新疆省は、党組織、軍、政府の3つの系統において、彭徳懐の指導下に置かれていたと言えよう。彭徳懐の下には、30年代から西北工作を担ってきた習仲勳が、中共中央西北局第二書記、西北軍政委員会副主席の地位にあった。50年以降、彭徳懐が「抗米援朝」（朝鮮戦争）の指揮のため朝鮮に派遣されると、習仲勳が新疆の統治に対し指導を行うようになり、王震率いる中共中央新疆分局と衝突したが、このことは後述する<sup>26</sup>。

新疆省の党指導部とその上位機関である中共中央西北局は、漢族幹部によって固められていた。党指導部が漢族幹部によって独占されていたのは、「大漢族主義」的な発想から来ていたというより、少数民族のなかに中共黨員がほとんど存在しなかった当時の現実を反映していたと考えられる。毛沢東が、1949年11月14日付の彭徳懐、中共中央西北局に宛てた指示のなかで、「大規模な少数民族

---

我々の使命は必ず円満に、成功裏に完成できよう」と述べている。『包爾漢選集』（北京：民族出版社、1989年）、頁1。

<sup>25</sup> 新疆軍区は、1949年12月、西北軍区（大軍区）に所属する二級軍区として成立し、西北軍区の領導下に置かれた。55年、当時全国に6個あった大軍区が12個に再編された際に、新疆軍区は独立した大軍区とされ、中央軍事委員会の直接の領導下に入った。79年5月、新疆軍区は烏魯木齊軍区に改称された。烏魯木齊軍区は85年6月、当時全国に11個あった大軍区が7個に再編された際に、蘭州軍区と合併した。このとき新疆は蘭州軍区の領導下に入り、新たに新疆軍区（兵団級）が設置された。中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書『中國共産黨新疆維吾爾自治區組織史資料』頁835～836。

<sup>26</sup> この時期の習仲勳の動向については、伝記『習仲勳伝』（習仲勳傳編委會『習仲勳傳』下巻〔北京：中央文獻出版社、2013年〕）、資料集『習仲勳論統一戦線』（中共中央統戦部・中央文獻研究室編『習仲勳論統一戦線』〔北京：中央文獻出版社、2013年〕）が近年出版されている。

出身の共産主義幹部がいなければ、徹底して民族問題を解決し、民族反動派を完全に孤立させることは不可能である」と述べ、少数民族幹部の重要性を強調していたことから明らかなように、中共の少数民族幹部を養成し、党の指導部に少数民族を組み込むことが当時の方針であった。毛沢東の直接の指示もあり<sup>27</sup>、「新疆少数民族のなかでの党組織建立の若干の問題」に関する中共中央の指示が、49年11月16日付で、彭徳懐、王震、中共中央西北局宛に発出され、ソ連留学、一定期間の「闘争」等の経験のある、新疆の「少数民族中の先進分子」を入党させることが適当であると見なされた<sup>28</sup>。

毛沢東の意向と49年11月16日付の中共中央の指示の結果、一部の少数民族エリートの中共入党の手続きが急ピッチで進められ、12月30日にブルハン、セイフディンら15人の入党の宣誓を行う儀式が開かれ、「少数民族中の先進分子」と見なされた少数民族エリートが候補期間を経ずに入党を果たした<sup>29</sup>。翌50年10月11日には、ブルハンとセイフディンが、中共中央新疆分局の委員となることが決定された<sup>30</sup>。こうして、中共中央新疆分局委員のうち少数民

---

<sup>27</sup> 49年10月15日付のセイフディンの入党申請に対し、毛沢東は自ら入党に同意する旨を指示し、また周恩来に対し、セイフディンらは「中国共産党に直接転入してよく、予備期間を経なくてよい」と言ったという。この間の事情については、以下にまとまっている。朱培民・陳宏・楊紅、前掲書『中国共産党與新疆民族問題』頁42～43；中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書『中国共産黨新疆維吾爾自治區組織史資料』頁23。

<sup>28</sup> 中共中央文獻研究室・中共新疆維吾爾自治區委員會編『新疆工作文獻選編（1949—2010）』（北京：中央文獻出版社、2010年）、頁29～30。

<sup>29</sup> このとき、ブルハンを紹介したのは王震と徐立清、セイフディンを紹介したのは王震と鄧力群であった。中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書『中国共産黨新疆維吾爾自治區組織史資料』頁23。

<sup>30</sup> 中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書『中国共産黨新疆維吾爾自治區組織史資料』頁24。

族の占める割合は13人中2人（約15%）となり、党指導部にも少数ながら少数民族が組み込まれることとなった。しかし、なお漢族が多数派であったことには変わりない。漢族が党組織の上層部を独占する傾向は、51年6月の中共中央新疆分局の改組にも現れている。51年6月に新たに4人が委員に加えられ、18人の体制となった中共中央新疆分局は、同時に常務委員会を設置することとなり、王震（第一書記）、徐立清（第二書記）、張邦英（第三書記）、高錦純、鄧力群、饒正錫の6人が常務委員とされた<sup>31</sup>。この時期の常務委員会には、少数民族委員が含まれておらず、漢族のみで構成されていた。党権力は、主として漢族が独占していたと言えよう。

建国初期の新疆では、党・国家機関ともに、少数民族の登用を進めており、特に国家機関（人民政府）の側では、政府部門の指導的地位の約半数が少数民族によって占められ、ウイグル族以外の少数民族も一定数のポストが割り当てられていた。しかし、党指導部においては、中共中央新疆分局常務委員会常務委員に少数民族が組み込まれないなど、漢族が上層部を独占する傾向があったと言える。権力の中心は、漢族地域（中国で多用される表現では、「関内」<sup>32</sup>）から進出してきた「よそ者」、すなわち「帝国」のコア地域の出身者によって固められていたと結論することができよう。

### 三 中共中央新疆分局指導部の改組

新疆省指導部に生じた最初の大きな変化として、1952年6月の

---

<sup>31</sup> 中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書『中國共産黨新疆維吾爾自治區組織史資料』頁24。

<sup>32</sup> 関内とは、ここでは明代の長城の西端にあたる嘉峪関（現、甘肅省）より東の、歴史的に漢族が多く住む地域を指す。

中共中央新疆分局常務委員会議において生じた中共中央新疆分局の改組が挙げられる。このとき新疆省指導部はどのような変化を見ることになったのだろうか。また改組の背景には、大規模な少数民族幹部の抜擢という方針の他に、何があったのであろうか。52年6月の中共中央新疆分局常務委員会議において討議されたのは、主に新疆の「牧区」<sup>33</sup>での工作における「錯誤」であったとされる。新疆における「牧区」とは、主としてカザフ遊牧民の多く住む北疆（新疆の北部）に広がっている。この「牧区」工作の「錯誤」とは一体何を意味するのであろうか。

実は、49年の新疆「解放」後も、人民解放軍は、中共の支配に服さない勢力と激しい戦闘を続けていた。そうした勢力の代表格が、カザフ族の首領オスマン・バートウル（烏斯滿・巴圖爾）であった<sup>34</sup>。カザフ族の大衆をオスマンらから切り離し、中共政権側に帰順させるため、中共中央新疆分局はカザフ族人民代表会議を50年5月に開催し<sup>35</sup>、同時期に大規模な「剿匪」部隊を投入し、オスマンの勢力を攻撃するなどした<sup>36</sup>。しかし、オスマンの勢力はその

---

<sup>33</sup> 「牧区」とは、通常日本語にない表現だが、「農業区」に対する概念で、農業に対し牧畜が相対的に盛んな地域を指す。ここでは「牧区」とする。なお、「牧区」は主として多民族地区であり、「牧区」に対する政策は民族政策と密接な関係を持って論じられることが多い。この点に関しては、さしあたり、何潤『當代中國民族問題的特點和發展規律』（北京：民族出版社、1992年）、頁82～99。

<sup>34</sup> オスマンについては、Justin M. Jacobs, “The Many Deaths of a Kazak Unaligned: Osman Batur, Chinese Decolonization, and the Nationalization of a Nomad,” *American Historical Review*, December 2010; Justin M. Jacobs, *Xinjiang and the Modern Chinese State* (Seattle; London: University of Washington Press, 2016)。

<sup>35</sup> 同会議は50年5月4日に迪化（現在のウルムチ）において開催された（『新疆日報』1950年5月5日）。

<sup>36</sup> 『新疆日報』によれば、5月17日頃までに解放軍は、オスマンの勢力の主要拠点



後も粘り強く抵抗を続けた。カザフ族の多くがオスマンらの勢力を支持し、当局の思惑通りになかなか帰順しなかったことは、当局が当時、帰順者の「生命の安全を絶対に保護する」<sup>37</sup>ことを繰り返し呼びかけていたことから推察される<sup>38</sup>。その後オスマンは、解放軍の「剿匪」部隊によって生け捕りにされ<sup>39</sup>、新疆省各族各界人民代表会議において特設された省各族各界人民臨時審判委員会によって、51年4月29日、死刑を宣告され、同日処刑された<sup>40</sup>。しかし、解放軍の追撃を免れた支持者たちは、「民族団結」を謳う中華人民共和国を続々と後にし、トルコおよび世界各地に亡命したのである<sup>41</sup>。

その後まとめられた報告の草案によれば、このとき中共中央新疆分局は以下の4つの「嚴重錯誤」を犯していたとされる。第一に「牧区」において階級を区分しようと企図し、「社会改革」を宣伝し、「牧主経済」の消滅を準備したこと、第二に牧民の自覚の程度、自発性の存否を顧みず、畜牧合作社の組織を企図したこと、第三に「匪特」（匪賊および特務）が煽動する大衆の反乱に対し、軍

---

に対し、空軍、装甲部隊を含む大規模な「剿匪」部隊を投入、オスマンの勢力を潰走させ、オスマンの勢力は内部分裂を来たし、解放軍は多数の捕虜と家畜を獲得、複数の部落が人民政府に投降したという。『新疆日報』1950年5月20日、22日。

<sup>37</sup> 『新疆日報』1950年6月4日。

<sup>38</sup> 50年7月28日にも、前線指揮所は、投降者と捕虜の「人格と風俗習慣を尊重し、決していかなる侮辱、虐待も許さない」という旨の指示が発出された（『新疆日報』1950年8月13日）。

<sup>39</sup> 『新疆日報』1951年2月21日。

<sup>40</sup> 『新疆日報』1951年4月30日。

<sup>41</sup> このときのカザフ難民については、最近の研究として、小野亮介『ブックレット＜アジアを学ぼう＞37 亡命者の二〇世紀 書簡が語る中央アジアからトルコへの道』風響社、2015年、43～56ページ。

事作戦に重点を置き、政治工作、敵を分解させる工作を充分に行つてこなかったこと、第四に「反革命分子」を鎮圧するなかで、攻撃対象が広すぎたことであつた<sup>42</sup>。

第一の点に見られる、中共中央新疆分局が「牧区」において「社会改革」を実施しようとしたことは、内部発行資料の『中国共産党新疆維吾爾自治区組織史資料』に、より詳しく示されている。同書によれば、中共中央新疆分局は、「『牧区』工作のなかで、中共中央と西北局の慎重かつ穩健漸進の方針を貫徹執行することを堅持できず、農村における土地改革の進行と同時に、『牧区』においても社会改革の進行を準備した。しかも、中央と西北局の同意を経ずに、『牧区』改革の文書を下級機関に伝達すると同時に上級機関に報告し、無組織・無規律の錯誤を犯した」<sup>43</sup>。ここから透けて見えることは、新疆分局と西北局の間に、「牧区」工作の方針を巡る微妙な対立があつた可能性である。

王震の伝記（1999年版）によれば、1952年6月の中共中央新疆分局常務委員会議において、当時中共中央西北局第二書記の習仲勳が王震を厳しく批判したことを伝えている。このとき習仲勳は、「王震同志を頂点とする新疆分局が犯した錯誤、特に王震同志が犯した錯誤は、慎重かつ穩健漸進の方針に違反した」と指摘し、更に、「（王震は）中央は正確で西北局は右傾だと言つて」、「西北局と鬭争する方法を用い、西北局を強迫して従わせようとした」と

---

<sup>42</sup> このことはこの後1952年7月に開かれた新疆省第2期党代表会議における「新疆における牧区工作に関する決議」の草案のなかに見られる。草案の要旨は、中共中央文献研究室他編、前掲書『毛澤東民族工作文選』頁159。また関連して、習仲勳傳編委會、前掲書『習仲勳傳』下巻、頁193～195。

<sup>43</sup> 中共新疆維吾爾自治区委員會組織部他編、前掲書『中国共産党新疆維吾爾自治区組織史資料』頁26。

述べ、王震を直截に非難した。またその他の出席者も新疆分局と王震を厳しく批判したという<sup>44</sup>。なお、興味深いことに、同書の2008年版ではこの部分は削除されている<sup>45</sup>。習仲勳の伝記（2013年版）も、この発言を紹介していないが、「牧区改革の問題」において中共中央新疆分局と中共中央西北局の間に方針の相違が生じており、毛沢東が関心を持っていたとしている<sup>46</sup>。

これらの点を総合すると、王震らは、西北局の穏健的方針に反し、「牧区」に対し急進的方針をとり、結果としてその「錯誤」を追及されたことが分かる。「錯誤」を糾弾し、新疆「牧区」工作の穏健化の推進を現場で指揮したのは習仲勳であったが、習仲勳の動きは毛沢東の意向に沿ったものであったことも既に知られている<sup>47</sup>。毛沢東は、政治局会議後に新疆に派遣された習仲勳と連絡をとりながら、「牧区」工作の基本方針の策定に自ら関与していた。たとえば、52年7月に開かれた新疆省第2期党代表会議における「新疆の農業区における土地改革実行に関する決議」と「新疆における牧区工作に関する決議」は、その草案に毛沢東が自ら指示を書き入れたものであった<sup>48</sup>。新疆情勢の分析と問題解決方針に関する52年7月16日の習仲勳の報告に対し、毛沢東は正確であると評価し、そのように行うよう指示している。その後の報告に対しても批評と修正点を与えており、当時両者が密接に連携したことが窺い知

---

<sup>44</sup> 王震傳編寫組、前掲書『王震傳』上（1999年）、頁516。

<sup>45</sup> 王震傳編寫組、前掲書『王震傳』（2008年）、頁395。

<sup>46</sup> 習仲勳傳編委會、前掲書『習仲勳傳』下巻、頁191。

<sup>47</sup> そのような見方をとっているのが、習仲勳傳編委會、前掲書『習仲勳傳』下巻、頁190～198。

<sup>48</sup> 中共中央文獻研究室他編、前掲書『毛澤東民族工作文選』頁158～160；習仲勳傳編委會、前掲書『習仲勳傳』下巻、頁191～192。

れる<sup>49</sup>。

習仲勳は毛沢東と連携しつつ、中共中央統一戦線部副部長、民族事務委員会副主任の劉格平（回族）とともに新疆に入り、新疆省第2期党代表会議を中心となって運営し、中共中央新疆分局の指導層を引き連れてイーニン（伊寧）県、天山山脈の「牧区」を慰問に訪れるなどし、「牧区」工作の方針転換を指揮した<sup>50</sup>。毛沢東は北疆の人々を敵に回してしまったことを重く受け止め、習仲勳と劉格平を現地に赴かせ、「錯誤」を糾正したのであろう<sup>51</sup>。

---

<sup>49</sup> 中共中央文獻研究室他編、前掲書『毛澤東民族工作文選』頁160、166～167；習仲勳傳編委會、前掲書『習仲勳傳』下巻、頁193。

<sup>50</sup> 習仲勳ら一行は7月28日にイーニンに飛び、視察を開始した。イーニンでは、アフマディジャンら烈士の墓に参拝した後、アフマディジャン夫人（マイヌル）を慰問に訪れた。翌29日は、宗教界、商工業界の人士を集めた座談会が催され、各族各界人士300人がこれに参加した。会場で劉格平は、「各民族人民の風俗習慣、宗教信仰を自由とする人民政府の政策」を説明した（『新疆日報』1952年8月2日）。8月6日、王思茂、ブルハン、セイフディンらに従え、天山の「牧区」を「慰問」に訪れた習仲勳は、「カザフ族は本来、勇敢で、勤勉で、優秀な民族である。ただカザフ族同胞は歴史的に圧迫を受けてきた。新疆の解放は、国民党反動統治者の新疆各族人民に対する圧迫を終わらせた。三年間の各種事実がそのことを物語っている。カザフ人民はただ毛主席の領導下でのみ、各民族と親密に団結し、社会秩序を安定ならしめ、生活をよくし、牧牛、牧羊を發展させることができる。最後にカザフ族牧民の人々と家畜の両方の健康を祝し、またカザフ族同胞の生活が日に日に良くなることを祈る」と述べた。その後、カザフ族の代表は、解放後、生活が日増しに良くなり、毛主席に感謝していることを述べ、乗馬の競争や「刁羊」と呼ばれる伝統競技を披露したという（『新疆日報』1952年8月11日）。

<sup>51</sup> 第11期3中全会以降、この「錯誤」についても歴史の見直しが進められ、1979年3月17日、1952年の新疆省第2期党代表会議の「牧区」工作に関する方針および政策は「完全に正確」であるものの、王震に対して向けられた批判は現実には符合せず、当時王震を罷免したことは公正でなかったと結論づけられたといわれる（當代中國叢書編輯部『當代中國的新疆』〔北京：當代中國出版社、1991年〕、頁87～88）。この点を指摘し、新疆省第2期党代表会議がもたらした負の影響を主張するのが、最近出版された王思茂の伝記である（陳伍國『王思茂傳』〔北

ここで中共中央新疆分局の構成の変化に注目したい。1952年6月の中共中央新疆分局常務委員会議の結果、王震に代わり、王恩茂（当時、南疆区党委員会第一書記）が新疆分局第一書記に就任することとなった。また、このときの分局の改組により、新たに現地民族出身者が新疆分局常務委員会に引き入れられ、セイフディンが第四書記に就任し、セイフディンとブルハンが少数民族として初めて新疆分局常務委員となった<sup>52</sup>。こうして常務委員会における少数民族は、8人中2人となり、少数民族の比率は25%に達した。

ここでブルハンとセイフディンが常務委員に引き立てられた背景には、前述した「牧区」工作における「錯誤」の糾弾と政策の穏健化に伴い、党指導部において現地出身者と協力して現地の実情を把握する必要性が一層強く認識されていたことが考えられる。このような必要性は、52年7月に開催された新疆省第2期党代表会議

---

京：中國文史出版社、2014年）、頁290）。他方、習仲勳の伝記は、前段の新疆省第2期党代表会議の「牧区」工作に関する方針および政策が「完全に正確」であったという前段のみを引用し、王震に対する批判、罷免が公正でなかったという後段には触れていない（習仲勳傳編委會、前掲書『習仲勳傳』下巻、頁190～198）。王震批判の解釈については、今なお微妙な問題を孕んでいると考えられるが、習仲勳の秘書張志功は、自らの著書のなかで、習仲勳と王震の間に意見の不一致があったものの、2人の深い友誼に影響を与えることはなかったとして、2人の友好関係を強調している（張志功『難忘的二十年——在習仲勳身邊工作的日子裡』〔北京：解放軍出版社、2013年〕、頁104～107）。なお、80年代に自治区人民政府主席を務め、第10期全人代常務委員会副委員長となったイスマイル・エメトゥ（ウイグル族）が、2013年に出版された習仲勳を称える文集のなかで、このときの「牧区改革」を高く評価している（司馬義・艾買提『我所了解的習仲勳同志』中共中央黨史研究室編『習仲勳記念文集』〔北京：中共黨史出版社、2013年〕、頁21～22）。

<sup>52</sup> 同会議まで新疆分局常務委員会は漢族によって独占されており、ブルハン、セイフディンは分局委員であった（中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書『中國共產黨新疆維吾爾自治區組織史資料』頁25～27）。

において、「会議に参加している同志全体が王震同志と分局の工作指導中の錯誤を一切余すところなく暴露し、これを批判する」ことを、習仲勳が幹部に要求し、特に現地幹部が意見を多く発表することを奨励したとされることから窺い知れよう<sup>53</sup>。

この点に加えて、ブルハンとセイフディンの昇格の背景には、当時、漢族幹部と現地民族幹部の「団結」の必要性が改めて強く認識されていたこと、それから「民族団結」に関連するセイフディンのこれまでの功績も挙げられるだろう。新疆省第2期党代表会議では、「牧区」工作の穩健化に加えて、「民族団結」を実現するための幹部団結の必要性が指摘されていた。『中国共産党新疆維吾爾自治区組織史資料』によれば、新疆省第2期党代表会議の決議は、新疆において「民族団結」が根本的に重要な意味を持っており、「民族団結」を成し遂げるためには、外から来た漢族幹部と地元の民族幹部の団結が必要であるという旨を強調し、特に「大民族主義の傾向」を防止、克服しなければならないことを改めて指摘したという<sup>54</sup>。大民族主義、すなわち大漢族主義の防止、克服のために重要なことは、大漢族主義に反対すると同時に、少数民族のなかに存在する地方民族主義に反対することであったことは言うまでもない。こうした状況下で、政権が必要としていたのは、少数民族のなかに存在する地方民族主義を押さえ込み、漢族との「民族団結」を実現できる少数民族エリートであった。この点、52年6月の分局改組により第四書記に就任したセイフディンは、新疆分局民族部長とし

---

<sup>53</sup> 習仲勳報告のこの文面は、旧版の『王震伝』のなかに見られる（王震傳編寫組、前掲書『王震傳』上〔1999年〕、頁518）。なお、この部分も2008年版では削除されている（王震傳編寫組、前掲書『王震傳』〔2008年〕、頁397）。

<sup>54</sup> 中共新疆維吾爾自治区委員會組織部他編、前掲書『中国共産党新疆維吾爾自治区組織史資料』頁26。

て<sup>55</sup>、漢族幹部と少数民族幹部を団結させるために、これまで重要な役割を果たしてきた人物であった。

一例を挙げるならば、51年4月から5月にかけて開かれた新疆省各族各界人民代表会議における、セイフディンの「高度な愛国主義精神と国際主義的大団結を強化し労働人民の真正なる解放のために闘争する」と題する報告（51年5月2日）<sup>56</sup>が指摘できよう。セイフディン報告の特徴的な点は、民族幹部のなかに漢族の古参幹部を排斥したり軽視したりする傾向があることを指摘した点である。セイフディンは、人力車引きを生業とする漢族労働者の例をひいて、彼ら漢族の労働者が少数民族を圧迫したことなどなく、彼らもまた圧迫を受けてきた被抑圧者であると訴えた。そして「現地幹部および各民族人民は、漢族の古参幹部にならって努力し、長年経験を積んできた中国共産党、それから人民解放軍にならって学習しなければならない」と主張し、現地民族幹部は漢族幹部と党中央、人民解放軍の方針をよく学習すべきであると要求した<sup>57</sup>。セイフディンは、新疆分局民族部長として、こうした問題への対処の役割を新疆分局のなかで分担されていたと考えられる。彼は新疆省各族各界人民代表会議閉幕後の6月、新疆分局に統一戦線部が発足した際

---

<sup>55</sup> セイフディンは50年6月から51年6月まで民族部長を務めた（中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書『中国共産黨新疆維吾爾自治區組織史資料』頁33）。

<sup>56</sup> 『新疆日報』1951年5月3日。

<sup>57</sup> 『新疆日報』1951年5月8日。同じ51年4月から5月の新疆省各族各界人民代表會議において、大漢族主義批判を担当したのは、新疆省人民政府副主席の高錦純であった。漢族の彼は、セイフディンと対照的に、漢族の「外から来た幹部は現地幹部にならって学習しなければならない」（『新疆日報』1951年5月12日）と述べ、セイフディンと役割分担していたように見える。

に、初代統一戦線部長に就任した<sup>58</sup>。まさに新疆省において「統一戦線」方式により政治エリート集団の団結を推進する要職に就いたのである。

またセイフディンは、中共と現地社会をつなぐ少数民族出身の体制内エリートの代表格としても、重要な役回りを果たしていた。その一例として、50年2月の中ソ友好同盟相互援助条約締結後、3月27日に中ソ間で合弁会社をつくる協定が結ばれ、新疆にソ連の権益が存続することになった問題が挙げられよう<sup>59</sup>。ソ連の権益に対し、新疆の世論および中共の党内に不満と屈辱の思いも存在していたと推測される。そのような状況下で、自身もモスクワに飛んで中ソ談判に参加していたセイフディンは<sup>60</sup>、新疆帰還後の4月27日、歓迎晩餐会の席上で、「ソ連の援助の下で、我々は落ちこぼれの農業省である新疆を、工業化の先進省に変化させることができる」ことを強調した。特に経済合作協定に関しては、セイフディンは以下のように説明している。「経済合作の面では、新疆において石油と非鉄金属の開発が必要であり、この2つの協定は、本省の地下資源の開発並びに利用、工業の発展、経済と交通事業の繁栄にとって極めて大きな意義を有する。この経済合作協定は、平等原則と相互協力、友好の関係の上に締結され、本省地下資源の開発を行う組織の会社のなかには、双方とも平等な数の代表と人員が参加し、双方の

---

<sup>58</sup> 中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書『中國共產黨新疆維吾爾自治區組織史資料』頁33。

<sup>59</sup> この問題については、さしあたり、石井明『中ソ関係史の研究（1945-1950）』（東京大学出版会、1990年）、214～220ページ。

<sup>60</sup> セイフディンは50年1月30日、中ソ間の交渉に参加するため、新疆省人民政府代表団を率いて、モスクワに向かい、4月22日にイーニンを経由して迪化に帰還した（『新疆日報』1950年2月2日、1950年4月27日）。



出資金は平等であり、所得利潤は分け合い、そこにはいかなる不平等もどちらか一方が優勢を占める現象も起きていない」。そしてセイフディンは、「ソ連は中国の東北各省を侵略、占領し、今また新疆省を侵略、占領しようとしている」などという「帝国主義者」の「誹謗」、「各種謠言」が存在するとしてこれを牽制し、「中ソ経済合作を破壊しようと企む帝国主義者のいかなる誹謗に対しても断固反対し、中ソ両大国人民の間の友誼を永久に保持し鞏固なものとするため奮闘しなければならない」<sup>61</sup>と訴えた<sup>62</sup>。このように説明することで、セイフディンは新疆におけるソ連の経済利権に対し、聴衆の理解を求めたのであろう。

このときセイフディンは、豊富な例を挙げて、ソ連を礼讃した。特に、新疆に近いカザフ共和国、ウズベク共和国においていかに現地民族が発展を遂げたかを描写している点は興味深い<sup>63</sup>。セイフディンは中ソ国境の向こう側で、同じテュルク系諸民族が、社会主義の恩恵を享受している様子を力説することで、聴衆に新疆における

---

<sup>61</sup> 『新疆日報』1950年4月28日。

<sup>62</sup> これと同様の議論は、かつて多くの中共幹部によって繰り返され、たとえば王恩茂も同様に述べている（王恩茂『王恩茂文集』上冊〔北京：中央文獻出版社、1997年〕、頁106～107）。

<sup>63</sup> セイフディンは、「各民族の社会主義的友愛、団結および発展」に関して、ソ連ウズベク共和国、カザフ共和国において、現地民族の社会主義民族文化、芸術、文芸、教育が、ソ連領土内のその他民族と同様な勝利を収めていること、たとえば十月革命前に識字率が2%しかなかったウズベク族が、今や科学、学術、文化の上で巨大な発展を遂げていること、ウズベク共和国には36の高級学府、4500以上の初級学校、100万人以上の学生が存在していること、カザフスタンも革命前の識字率2%のところ、今や24の高級学府、約8300の初級学校、100万人以上の学生が存在していること、両国ともに科学アカデミー、数多くの図書館、クラブ、博物館、劇場を擁していること、「赤色ウズベキスタン」集団農場では完全に機械化された科学的方法で生産が行われていることを紹介した（『新疆日報』1950年4月28日）。

社会主義建設とソ連との同盟が有益であることを強調したのである。こうしたソ連についての描写は、具体的な記述であり、通り一遍のものとは思えない。1935年にソ連中央アジア大学に留学し、ロシア語を解し、ソ連の内情に通じているソ連留学組でなければ書けない内容であろう。セイフディンの個人的な背景には「ソ連通」という要素があることも、ここで強調しておきたい<sup>64</sup>。

この言わばソ連要素に加えて、セイフディンの個人的背景のもう一つの特徴として、三区革命を共に戦った、いわゆる「民族軍」に自らの権力基盤を有しており、中共中央もまたそれを認識していた点にも触れておきたい。「民族軍」とは、ここでは「新疆民族軍」を念頭に置き、三区革命の武装部隊を指す。セイフディンは、三区革命の主要指導者亡き後の49年10月、「民族軍」を代表して、「民族軍」の改名、再編等について毛沢東らと協議した経緯があった。交渉の結果、総勢1万4千人余りの「民族軍」は、人民解放軍に改称され（後に「第五軍」とされた）、人民解放軍に吸収されるかたちで全新疆に配置されることとなった<sup>65</sup>。この点から、毛沢東らが他でもなくセイフディンを、この問題の交渉相手と認識していたことが理解されよう。その後、「民族軍」は人民解放軍に吸収されたが、しかしそれゆえにセイフディンは人民解放軍内部にも自らの権力の根拠を持つこととなったのである。

---

<sup>64</sup> セイフディンはソ連に留学したことがあり、ソ連の国情に通じていたと見られる。セイフディンのソ連留学に関しては前註13を参照されたい。関連してセイフディンがソ連の「スパイ」であったという見方もあるが、これは推測の域をはず、根拠が存在するかは疑わしい。そのような見方の一例として、恐らく「紅衛兵情報」に基づき執筆されたと思われる、台湾で出版された以下がある。情報局情報研究室・匪情年報編輯委員會編『匪情年報1970』下、陸（台北：國防部情報局、1970年）、頁131。

<sup>65</sup> 中共中央文獻研究室編、前掲書『建國以來毛澤東文稿』第一冊、頁49、87、88。

こうして政権内部において存在意義を着実に高めていたセイフディンと、以前から省人民政府主席として、安全運転をしてきたブルハンが、政策の穏健化に合わせて、中共中央新疆分局において常務委員に昇格した。これに対し、王震は中共中央新疆分局第一書記の地位を失ったが、彼はこれによって失脚したのではなく、むしろ以後中央において昇進し、55年に解放軍副総参謀長、56年に国務院農墾部長に就任することになる。農墾部は、新疆軍区生産建設兵団を「領導」する機関でもあり<sup>66</sup>、中共の新疆統治において重要な意味を有する。しかも王震の後任の新疆分局第一書記に王震の子飼いの王恩茂が就いたことから明らかなように、王震は新疆に隠然たる影響力を残していた。中国共産党の支配を受容せず、人民解放軍に対し徹底抗戦を敢行したオスマンらは、自らの生命をもって、王震を関内に追いやったということとされるかもしれないが、王震もブルハンもセイフディンも、そうした機会を利用して昇進することはあっても、そのことによって政治生命に重大な傷がつくことはなかったのである。

#### 四 おわりに

本稿では、1949年の中華人民共和国の建国以降、52年に至る時期に、中共が新疆の統治を確固ならしめるにあたり、漢族中心の党指導部に部分的に少数民族エリートを組み込んだ点を論じてきた。党と現地社会、漢族幹部と少数民族幹部をつなぐ存在として、毛沢東から信頼された、少数民族出身の体制内エリートであるセイフディンが台頭し、彼を筆頭とする少数民族エリートが徐々に政権内部

---

<sup>66</sup> 中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編、前掲書『中國共産黨新疆維吾爾自治區組織史資料』頁835。

に増加した。少数民族の増加の一つの重大な契機として、従来の「牧区」工作が52年に習仲勲らにより「錯誤」と判断され、それを機に王震を頂点とする体制から王恩茂を中心とする体制に転換したことも指摘できる。ときの政策が穏健化を見るに至った時期に、少数民族が積極的に起用されたのである。

本稿が考察した時期は、今日まで続く中共の新疆統治の基礎が形作られた時期に相当する。今日の新疆ウイグル自治区党指導部も漢族の書記を中心とし、少数民族が一部加えられているが、指導部の民族構成の原型は既にこの時期に見ることができる。そして党組織上層部における少数民族エリートの起用には、習近平・現国家主席の父にあたる習仲勲が指導的役割を果たしていた。もともと、習仲勲は政策の穏健化を指導したのに対し、現政権の新疆政策はそれとはおよそ反対の方向に向かっているという違いもあり、これは歴史の皮肉というべきであろう。

(寄稿：2019年10月14日、採用：2019年11月26日)

# 中國共產黨統治新疆初期與 少數民族菁英的關係（1949-52年）

熊倉潤

（亞洲經濟研究所〈IDE-JETRO〉研究員）

## 【摘要】

近來，中國共產黨在新疆統治所造成的結構性和根本性矛盾終成爲國際社會主要關注的焦點。然而，較爲可惜的是，有關中國共產黨在新疆的統治，即納入當地少數民族的治理體制是如何開始的？根據歷史資料之實證性分析的這類文章僅有少數。自1949年12月新疆省人民政府成立以來，中國共產黨將當地的少數民族菁英引進納入新政府。而隨著1952年6月中共中央新疆分局的改組，在中共黨組織高層也擴大任用少數民族菁英。在這背後則是當時中國共產黨中央西北局第二書記習仲勳發揮了領導作用。由習仲勳領導的政策帶來穩定發展，更同時帶動了新一波少數民族菁英的招攬。本文聚焦探討中國共產黨在統治新疆初期（1949-52年）吸收少數民族菁英的政策作爲。

關鍵字：新疆、少數民族、王震、習仲勳、賽福鼎

# The Initial Period of the Chinese Communist Party's Rule of Xingjiang and its Relations with the Ethnic-minority Elites (1949-1952)

*Jun Kumakura*

Research Fellow, Institute of Developing Economies (IDE-JETRO)

## 【Abstract】

In recent years, the fundamental and systematic contradiction caused by the Chinese Communist Party's ruling of Xingjiang has become a focus of the global society's attention. However, it's a pity that there are very few empirical analyses based on historical data on how the Chinese Communist Party ruled Xingjing, particularly the initial incorporation of the local ethnic-minorities into its governance system. Since the establishment of the Xinjiang Uygur Autonomous Region (XUAR) in December 1949, the Chinese Communist Party (CCP) has brought in the local elites into the new government. As the Xinjiang Branch of the CCP Central Committee restructured in June 1952, the high ranking CCP officials increased the number of positions for the ethnic-minority elites. The leading power behind this implementation was Xi Zhongxun, the Second Secretary of the Northwest Political and Military Affairs Bureau. Xi Zhongxun's moderate policies led to a new wave of recruitment of the ethnic-minority elites at the same time. This article will explore how the Chinese Communist Party assimilated the elites of the ethnic-minority at the early stage of its rule in Xingjing (1949-1952).

**Keywords:** Xingjing, ethnic-minority, Wang Zhen, Xi Zhongxun, Saifuddin Azizi

## 〈参考文献〉

石井明『中ソ関係史の研究（1945-1950）』（東京大学出版会、1990年）。

Ishii, Akira, *Chuso kankeishi no kenkyu (1945-1950) [A Study of the History of Sino-Soviet Relations, 1945-1950]*, University of Tokyo Press, 1990.

王柯『東トルキスタン共和国研究——中国のイスラムと民族問題』（東京大学出版会、1995年）。

Wang, Ke, *Higashi torukisutan kyowakoku kenkyu-chugoku no isuramu to minzoku mondai [A study of the East Turkestan Republic : muslims and the national question in China]*, University of Tokyo Press, 1995.

小野亮介『ブックレット<アジアを学ぼう> 37 亡命者の二〇世紀 書簡が語る中央アジアからトルコへの道』風響社、2015年。

Ono, Ryosuke, *Bukkuretto 'ajia wo manabo'37, bomeisha no nijisseiki : shokan ga kataru chuo ajia kara toruko eno michi [Booklet "Learning about Asia" 37. Exiles of the 20th Century: Letters Telling Roads from Central Asia to Turkey]*, Fukuyosha, 2015.

田中周「新疆ウイグル自治区における国家統合と民族区域自治政策——1950年代前半の自治区成立過程から考える——」『早稲田政治公法研究』第94号（2010年）、63～76ページ。

Tanaka, Amane, "shinkyo uiguru jichiku ni okeru kokka togo to minzoku kuiki jichi seisaku 1950 nendai zehan no jichiku seiritsu katei kara kangauer" [The policy of the PRC on national regional autonomy in Xinjiang in the early 1950s], *The Waseda Study of Politics and Public Law*, No.94, 2010, pp.63-76.

寺山恭輔『スターリンと新疆』（社会評論社、2015年）。

Terayama, Kyosuke, *Sutarin to shinkyo [Stalin and Xinjiang]*, Shakaihyoronsha, 2015.

『包爾漢選集』（北京：民族出版社、1989年）。

*Baoerhan xuanji [Selected Works of Burhan Shehidi]*, Beijing : Publishing House of Minority Nationalities, 1989.

『新疆日報』1950年1月3日、2月2日、4月27日、4月28日、5月5日、5月20日、5月22日、6月4日、8月13日、1951年2月21日、4月30日、5月3日、5月8日、5月12日、1952年7月9日、8月2日、8月11日。

*Xinjiangribao [Xinjiang Daily]*, January 3, 1950/ February 2, 1950/ April 27, 1950/ April 28, 1950/ May 5, 1950/ May 20, 1950/ May 22, 1950/ June 4, 1950/ August 13, 1950/ February 21, 1951/ April 30, 1951/ May 3, 1951/ May 8, 1951/ May 12, 1951/ July 9, 1952/ August 2, 1952/ August 11, 1952.

中共中央文獻研究室編『建國以來毛澤東文稿』第一冊（北京：中央文獻出版社、1987年）。

Zhonggong zhongyang wenxian yanjiushi, ed., *Jianguo yilai maozedong wengao [Manuscripts written by Mao Zedong since the Establishment of PRC]*, Vol.1, Beijing : Central Party Literature Press, 1987.

中共中央文獻研究室他編『毛澤東民族工作文選』（北京：中央文獻出版社・民族出版社、2014年）。

Zhonggong zhongyang wenxian yanjiushi, et al. eds., *Maozedong minzu gongzuo wenxuan [Selected Works by Mao Zedong on National Work]*, Beijing : Central Party Literature Press, Publishing House of Minority Nationalities, 2014.

中共中央統戰部・中央文獻研究室編『習仲勳論統一戰線』（北京：中央文獻出版社、2013年）。

Zhonggong zhongyang tongzhanbu, Zhonggong zhongyang wenxian yanjiushi, eds., *Xizhongxun lun tongyi zhanxian [Xi Zhongxun's Thought on United Front]*, Beijing : Central Party Literature Press, 2013.

中共中央文獻研究室・中共新疆維吾爾自治區委員會編『新疆工作文獻選編（1949—2010）』（北京：中央文獻出版社、2010年）。

Zhonggong zhongyang wenxian yanjiushi, Zhonggong xinjiang weiwuer zizhiqu weiyuanhui, eds., *Xinjiang gongzuo wenxian xuanbian '1949-2010' [Selected Literature on Xinjiang Work (1949-2010)]*, Beijing : Central Party Literature Press, 2010.

中共新疆維吾爾自治區委員會組織部他編『中國共產黨新疆維吾爾自治區組織史資料』（北京：中共黨史出版社、1996年）。

Zhonggong xinjiang weiwuer zizhiqu weiyuanhui zuzhibu, et al. eds., *Zhongguo gongchandang xinjiang weiwuer zizhiqu zuzhishi ziliao [Data on Organizational History of the Xinjiang Uygur Autonomous Region of the Communist Party of China]*, Beijing : History of Chinese Communist Party Publishing House, 1996.

王恩茂『王恩茂文集』上冊（北京：中央文獻出版社、1997年）。

Wang, En-mao, *Wangenmao wenji [Selected Works of Wang Enmao]*, Vol.1, Beijing : Central Party Literature Press, 1997.

王震傳編寫組『王震傳』上（北京：當代中國出版社、1999年）。

Wangzhen's Biography Editorial Team, *Wangzhen zhuan [Biography of Wangzhen]*, Vol.1, Beijing : Contemporary China Publishing House, 1999.

王震傳編寫組『王震傳』（北京：當代中國出版社、2008年）。

Wangzhen's Biography Editorial Team, *Wangzhen zhuan [Biography of Wangzhen]*, Beijing : Contemporary China Publishing House, 2008.

包爾漢『新疆五十年』（北京：文史資料出版社、1984年）。

Burhan, Shahidi, *Xinjiang wushi nian [Fifty Years in Xinjiang]*, Beijing : Wenshi ziliao chubanshe, 1984.

包爾漢『新疆五十年 包爾漢回憶錄』（北京：中國文史出版社、1994年）。

Burhan, Shahidi, *Xinjiang wushi nian baoerhan huiyilu [Fifty Years in Xinjiang: a Memoir by Burhan Shehidi]*, Beijing : Chinese Literature and History Press, 1994.

司馬義・艾買提「我所了解的習仲勳同志」中共中央黨史研究室編『習仲勳紀念文集』（北京：中共黨史出版社、2013年）、頁21~27。

Ismail, Amat, "Wo suo liaojie de xizhongxun tongzhi" [Xi Zhongsun: the Comrade I Know],



Zhonggong zhongyang dangshi yanjiu shi, ed., *Xizhongxun jinian wenji [Commemorative Anthology of Xi Zhongxun]*, Beijing : History of Chinese Communist Party Publishing House, 2013, pp.21-27.

白振聲・鯉淵信一編『新疆現代政治社會史略』（北京：中國社會科學出版社、1992年）。

Bai, Zhen-sheng, Koibuchi, Shinichi, eds., *Xinjiang xiandai zhengzhi shehui shilue [A Concise Political and Social History of Modern Xinjiang]*, Beijing: China Social Sciences Press, 1992.

朱培民・陳宏・楊紅『中國共產黨與新疆民族問題』（烏魯木齊：新疆人民出版社、2004年）。

Zhu, Pei-min, Chen-Hong, Yang, Hong, *Zhongguo gongchandang yu xinjiang minzu wenti [Communist Party of China and Xinjiang Ethnic Problems]*, Urumqi : Xinjiang renmin chubanshe, 2004.

何明主『共和國人物檔案 共和國首任地方黨政主要領導』（北京：中國大百科全書出版社、2010年）。

He, Ming-zhu, *Gongheguo renwu dangan, gongheguo shouren defang dangzheng zhuyao lingdao [Profiles of Republic Figures: First Main Local Party and Political Leaders of the Republic]*, Beijing : Encyclopedia of China Publishing House, 2010.

何潤『當代中國民族問題的特點和發展規律』（北京：民族出版社、1992年）。

He, Run, *Dangdai zhongguo minzu wenti de tedian he fazhan guilv [Characteristics and Developing Patterns of Ethnic Problems in Contemporary China]*, Beijingmin : Publishing House of Minority Nationalities, 1992.

呂劍人『我的回憶』（西安：陝西人民出版社、1997年）。

Lu, jian-ren, *Wo de huiyi [My Memories]*, Xian : Shanxi renmin chubanshe, 1997.

孟慶春・陳重伊『共和國省長』（北京：華文出版社、2008年）。

Meng, qing-chun, Chen, Zhong-yi, *Gongheguo shengzhang [Governor of the Republic]*, Beijing : Huawen chubanshe, 2008.

陳西夫・呂乾訓編『王恩茂日記』（北京：中央文獻出版社、1995年）。

Chen, Xi-fu, Lu, Gan-xun, eds., *Wangenmao riji [The Diary of Wang Enmao]*, Beijing : Central Party Literature Press, 1995.

陳伍國『王恩茂傳』（北京：中國文史出版社、2014年）。

Chen, Wu-guo, *Wangenmao chuan [Biography of Wang Enmao]*, Beijing : Chinese Literature and History Press, 2014.

習仲勳傳編委會『習仲勳傳』（北京：中央文獻出版社、2013年）。

Xi Zhongxun's Biography Editorial Board, *Xizhongxun zhuan [Biography of Xi Zhongxun]*, Beijing: Central Party Literature Press, 2013.

張志功『難忘的二十年——在習仲勳身邊工作的日子裡』（北京：解放軍出版社、2013年）。

Zhang, Zhi-gong, *Nanwang de ershi nian—zai xizhongxun shenbian gongzuo de rizili*

- [*Unforgettable Twenty Years: In the Days of Working with Xi Zhongxun*], Beijing : Jiefangjun chubanshe, 2013.
- 情報局情報研究室・匪情年報編輯委員會編『匪情年報 1970』下 (台北：國防部情報局、1970 年)。
- Communist China Intelligence Yearbook Editorial Board, Intelligence Research Office of Military Intelligence Bureau, eds., *Feiqing nianbao 1970 [Communist China Intelligence Yearbook (1970)]*, Vol.2, Taipei : Military Intelligence Bureau, 1970.
- 張聲作編『當代中國少數民族名人錄』 (北京：華文出版社、1992 年)。
- Zhang, Sheng-zuo, ed., *Dangdai zhongguo shaoshu minzu mingrenlu [Who's Who of Contemporary Chinese Minorities]*, Beijing : Huawen chubanshe, 1992.
- 當代中國叢書編輯部『當代中國的新疆』 (北京：當代中國出版社、1991 年)。
- Contemporary Chinese Series Editorial Department, *Dangdai zhongguo de xinjiang [Xinjiang of Contemporary China]*, Beijing : Contemporary China Publishing House, 1991.
- 鄧力群『鄧力群自述 (1915-1974)』 (北京：人民出版社、2015 年)。
- Deng, Li-qun, *Dengliqun zishu '1915-1974' [The Self-Report of Deng Liqun (1915-1974)]*, Beijing : People's Publishing House, 2015.
- 賽福鼎・艾則孜『天山雄鷹：阿布杜克力木・阿巴索夫生平』 (北京：中國文史出版社、1987 年)。
- Saifuddin, Azizi, *Tianshan xiongying : abudukelimu abasuofu shengping [The Eagle of Tianshan: Biography of Abdulkерim Abbas]*, Beijing : Chinese Literature and History Press, 1987.
- 賽福鼎・艾則孜『賽福鼎回憶錄』 (北京：華夏出版社、1993 年)。
- Saifuddin, Azizi, *Saifuding huiyilu [The Memoir of Saifuddin Azizi]*, Beijing : Huaxia Publishing, 1993.
- Boorman, Howard L. and Richard C. Howard, eds., *Biographical Dictionary of Republican China*, vol. 3 (New York: Columbia University Press, 1970).
- Forbes, Andrew D. W., *Warlords and Muslims in Chinese Central Asia: a political history of Republican Sinkiang 1911-1949* (Cambridge; New York: Cambridge University Press, 1986).
- Jacobs, Justin M., “The Many Deaths of a Kazak Unaligned: Osman Batur, Chinese Decolonization, and the Nationalization of a Nomad,” *American Historical Review*, December 2010, pp. 1290-1314.
- Jacobs, Justin M., *Xinjiang and the Modern Chinese State* (Seattle; London: University of Washington Press, 2016).
- McMillen, Donald H., *Chinese Communist Power and Policy in Xinjiang, 1949-1977* (Boulder Colorado: Westview Press, 1979).
- Millward, James A., and Nabijan Tursun, “Political History and Strategies of Control,” in S. Frederick Starr, ed., *Xinjiang: China's Muslim Borderland* (Armonk, N. Y.: M. E. Sharpe, 2004), pp. 63-98.

Wang, David D., *Under the Soviet Shadow, The Yining Incident, Ethnic Conflicts and International Rivalry in Xinjiang 1944-1949* (Hong Kong: The Chinese University Press, 1999).

Wolfgang, Bartke, ed., *Who's who in the People's Republic of China, 2<sup>nd</sup> Edition* (Munich; New York; London; Oxford; Paris: Saur, 1987).

